

フロンティアとしての島嶼世界  
——海域アジア・オセアニア研究のための予備的検討——

河野正治（東京都立大学）

1. はじめに

2022年4月1日、人間文化研究機構のグローバル地域研究推進事業の一環として、海域アジア・オセアニア研究プロジェクトがスタートし、4つの研究機関（国立民族学博物館、東洋大学、京都大学、東京都立大学）に研究拠点が設置された。グローバル地域研究推進事業とは、従来の固定的な地域像とは異なる空間連関への関心から、新たな地域像の提示を目指す事業である。その事業の1つである海域アジア・オセアニア研究プロジェクトは、以下の目標を掲げている。

「オーストロネシア」語族圏としての基層文化的な共通性を軸に、海域アジアからオセアニアにおけるヒトやモノ、情報をめぐる越境的な動きに関わる総合的な把握を目指します<sup>1</sup>。

ここに書かれているヒトやモノの越境的な移動への着目自体は、オセアニア研究がこれまで培ってきた視点としての、地続きのような交流に支えられる海域島嶼世界という認識にほかならず<sup>2</sup>、これ自体は何ら目新しいものではない。むしろ、「海域という視点を強調することで、東アジアや東南アジア、さらにはオセアニアといった複数の地域を同時に対象とできるような新たな地域研究の実践」<sup>3</sup>を指向できる点に、この枠組みが持つ独自の強みがある。

本稿はこのような海域アジア・オセアニア研究を遂行するにあたり、どのような研究の方向性がありうるのかを、主にミクロネシアを対象とする予備的な検討から提示するものである<sup>4</sup>。各拠点によって特色は異なるものの、海域アジア・オセアニア研究

<sup>1</sup> 大学共同利用機関法人・人間文化研究機構（2023年）「基幹研究プロジェクト」  
<https://www.nihu.jp/ja/research/trans-proj>（2023年2月28日最終閲覧）。

<sup>2</sup> 代表的な研究成果として、『海人の世界』（秋道〔編〕1998）や『海民の移動誌——西太平洋のネットワーク社会』（小野・長津・印東〔編〕2018）が挙げられよう。

<sup>3</sup> 「ネットワーク型基幹研究プロジェクト 地域研究推進事業「グローバル地域研究推進事業」基本計画」より抜粋。[https://www.nihu.jp/sites/default/files/research/MasterPlan\\_4thNetworkBased\\_01.pdf](https://www.nihu.jp/sites/default/files/research/MasterPlan_4thNetworkBased_01.pdf)（2023年2月28日最終閲覧）。

<sup>4</sup> 本稿の記述は、2022年10月28日に開催された「海域アジア・オセアニア研究プロジェクト東京都立大学拠点キックオフミーティング」において筆者が報告した内容

プロジェクトには少なからずの会員が何らかの形で関わっていることから、本稿のスケッチを通じて会員間の活発な議論を促すことができれば幸いである。

以下では、海域アジア・オセアニアという主題から派生する諸論点のうち、とりわけ地域間の人の往来をめぐる課題に着目し、「アジアのなかのオセアニア系」と「オセアニアのなかのアジア系」という2つの切り口から今後の研究の方向性を探る。

## 2. 海をわたる島民への注目——「アジアのなかのオセアニア系」をめぐって

筆者が研究の対象とするミクロネシア連邦では、1986年の独立時に締結された自由連合協定 (Compact of Free Association) によりアメリカへのビザなしでの渡航が認められたことを契機に、海をわたり移住する島民が増加した。それに伴い、アメリカ本土やハワイ、グアムなどでの移民コミュニティの形成 (清水 2004 ; 前川 2004 ; Falgout 2012 ; Hubbard 2016) や、アメリカへの還流移民としての経歴を通じたナショナルエリート<sup>5</sup>の育成 (Pinsker 1997: 180) といった主題が研究の遡上に載せられた。

しかしながら、管見の限りではあるが、ミクロネシア連邦からアジアへの移民は、これまでなかなか議論の対象として取り上げられてこなかった。その理由の1つには、移民コミュニティを形成できるほどアジアに移住者を送り出しているオセアニア島嶼国が、ごく少数に限られるという事情がある (「日本のなかのオセアニア系」に関する表1も参照)。

表1 日本におけるオセアニア系住民の出身国別人数

国名	在留人数	国名	在留人数
オーストラリア	8,960	ニュージーランド	3,160
キリバス	9	バヌアツ	7
サモア	66	パプアニューギニア	53
ソロモン	33	パラオ	35
ツバル	3	フィジー	272
トンガ	155	マーシャル	13
ナウル	2	ミクロネシア連邦	43

(法務省・出入国在留管理庁ホームページにおける2021年12月末時点のデータ<sup>5</sup>をもとに筆者作成)

北原卓也が在日トンガ人を対象とする研究のなかで「本国ではトンガ語と英語を共

にもとづく。

<sup>5</sup> 法務省・出入国在留管理庁 (2022年7月15日) 「在留外国人統計 (旧登録外国人統計) 統計表」 [https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei\\_ichiran\\_touroku.html](https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html) (2022年10月26日最終閲覧)。

通語としているため、日本は英語圏に比して一般的な移住先として選択肢に挙がることは少ない」(北原 2020: 162)と述べるように、アジアへの移民が進まない背景として、言語の問題は大きいだろう。これに加え、ビザの取得可能性、受け入れ先となるコミュニティとの関係などの面で、アジアはオセアニア島民の移住先の候補に挙がりにくいと考えられる。

だが、オセアニア島嶼部出身者の移動・移民経験を考えるうえで、主要な移住先としてのアメリカやオーストラリア、ニュージーランドとの関係にばかり注目している、(比較的少数でありながらも一定程度存在する)アジアに滞在するオセアニア島嶼部出身者の生活実践やその特異な経験が見過ごされてしまう。オセアニア島嶼部を対象とする歴史研究のなかで示唆されているように、西洋文化との接触や、英語圏の社会との相互交流しか取り上げなければ、地理的かつ歴史的に重要なはずのアジアとオセアニアの関係が不可視化されてしまう恐れがあるのだ (cf. D'Arcy and Mayo 2021: 232)。

アジアにおけるオセアニア系移民を扱った数少ない研究としては、北原卓也による在日トンガ人の研究が挙げられる。北原によると、在日トンガ人はラグビー留学を主な来日の機会としており、群馬県にあるキリスト教会を拠点に移民コミュニティを形成している(北原 2020)。北原が描くように、トンガと日本の間にもともとラグビー留学の制度があったわけではなく、教職目的で来日したトンガからの留学生がラグビーの試合で活躍したことが、トンガからのラグビー留学の促進やその後のキャリア形成の整備につながったという偶然は興味深く、オセアニア出身者による移民コミュニティ形成のあり方を考えるうえで示唆的な事例である。

移民コミュニティの形成に至らなかったとしても、アジアとの関係を個々に構築する島民がいることを忘れてはならない。たとえば、筆者がミクロネシア連邦のポーンペイ島で出会った人物のなかには、漁船の乗組員として仙台の石巻で数年間働き、家族への送金を続け、ポーンペイ島への帰郷後には貨物船の組員として数年に一度日本を訪れている中年の男性がいる。彼は自身が乗組員として働く貨物船が日本に寄港する際には、家族のために買い物をするのみならず、日本での飲酒を楽しみ、日本人との交流も図っている。こうした個人の経験をめぐる生活史のなかからも、アジアとオセアニアの特異なつながりが垣間見える可能性があるだろう。

また、オセアニア諸国への中国の進出という脈絡のなかで、ミクロネシア連邦の高官になるためのキャリア形成につながる主要な留学先が、アメリカから中国へと移行する可能性が論じられているように (Puas and D'Arcy 2021: 288, 291)、アジアに移民を積極的に送り出す気運が醸成されることも将来的にはありうる。こうした指摘からは、その時代時代の政治的動向や制度的条件を踏まえながら、送り出し先としてのアジアの可能性について考える余地も生まれる。

これらの点を踏まえれば、アジア諸国においてオセアニア系移民がどのように生活

を实践し、移住先や母国といかに関係性を築き上げているのかという問いは、主要な送り出し先とは異なるアジアに着目する視点から、オセアニア系の移民像を見なおすことを可能にする課題設定であり、今後の事例研究の進展が望まれる。

### 3. 雑多な流入者への注目——オセアニアのなかのアジア系をめぐって

ここからは、「オセアニアのなかのアジア系」に話を転じる。陸域ではなく海域に着目するという視点からオセアニアとアジアの関係を捉えなおすにあたり、中国が推進する「一带一路」構想に触れないわけにはいかない。これは2013年に習近平国家主席が表明した広域経済圏構想であり、中国の新たな改革開放政策である同時に、中国主導の新しい国際秩序にもかかわる（渡辺 2019: 3）。2015年には「一带一路」が「シルクロード経済ベルト」と「21世紀海上シルクロード」から成ることが発表され<sup>6</sup>、オセアニアは後者に組み込まれていることが明らかになった。

そもそも、台湾問題、排他的経済水域（EEZ）における海洋資源への関心、東アジアや東南アジアの窓口としての地政学的条件への関心から、中国はオセアニアへの関与を強めてきた（八塚 2018: 3；cf. 関根 2023: 249）。「一带一路」構想はそのような中国の動きを後押しし、活性化させるものであったと考えられる。

黒崎岳大はこうした中国の進出について、台湾との外交関係との関連から次のように述べる。

近年、一带一路構想の下、その影響力を強めている中国ではあるが（……）太平洋諸島では、これまで中国と台湾（中華民国）が外交関係を巡り激しく争っている。（……）ただし、世界に目を向けた場合、中国はアフリカや中南米の国々を次々と台湾から奪い返してきている。次のターゲットは太平洋諸島と言っても過言ではないだろう（黒崎 2019: 12）。

こうした動向のもとで、2019年にはソロモン諸島とキリバス共和国が「中国からの大規模なインフラ支援やビジネス交流を期待」（黒崎 2022: 134）する姿勢を打ち出し、台湾から中国へと外交関係を転換するなど、中国はオセアニアへの進出をますます強めている（表2も参照のこと）<sup>7</sup>。

---

<sup>6</sup> シルクロード経済ベルトは、①中国—中央アジア—ロシア—欧州、②中国—中央アジア—西アジア—ペルシャ湾—地中海、③中国—東南アジア—南アジア—インド洋の3つの経路から成る。他方、21世紀海上シルクロードは、④中国沿岸—南シナ海—インド洋—欧州、⑤中国沿岸—南シナ海—南太平洋の2つの経路を指す（渡辺 2019: 4）。

<sup>7</sup> ただし、オセアニアにおける外交関係が、中国と台湾の関係のみならず、アメリカ

表2 オセアニア諸国の外交にみる中台関係

	※ 国交・外交関係あり	中国	台湾	※ 国交・外交関係あり	中国	台湾
メラネシア	パプアニューギニア	○		キリバス	○	←2019年
	ソロモン諸島	○	←2019年	ナウル		○
	フィジー	○		ミクロネシア連邦	○	
	バヌアツ	○		マーシャル諸島		○
ポリネシア	サモア	○		パラオ		○
	トンガ	○		オーストラリア	○	
	クック諸島	○		ニュージーランド	○	
	ニウエ	○		他 仏領ポリネシア	○	
	ツバル		○	他 ニューカレドニア	○	

(毎日新聞の電子版の記事<sup>8</sup>をもとに筆者作成)

他方において、国家間の権力関係というマクロな脈絡ではなく、個々の住民の社会生活にかかわるミクロな脈絡に目を向けると、「中国の進出」とは異なるアジア系の関与がわかる。たとえば、私の研究対象地であるポーンペイ島には、フィリピン系の病院や商店があり、ホテルでもフィリピン人の従業員の姿を目にする。とりわけ医療の脈絡ではミクロネシア連邦からフィリピンへの行き来もある。拙著でもフィリピンに渡航して病院で治療を受けた島民について記述したことがあるが、この背景には、重病の場合には島内の病院での手術などが難しいという事情がある（河野 2019: 215）。

あるウェブサイトはこうした医療事情をめぐるポーンペイとフィリピンの関係について、ポーンペイの最高首長夫妻<sup>9</sup>への興味深いインタビュー記事を掲載している<sup>10</sup>。記事によると、最高首長夫人は心臓の症状にかかわる診断が必要であったことから、フィリピンに渡航し、心臓病センターを訪れたという。夫人は当初、ポーンペイ島に

やオーストラリア、ニュージーランドも含めた多国間関係として展開されるものであることには留意しておかなければならないだろう（cf. 黒崎 2022）。

<sup>8</sup> 毎日新聞（2021年7月29日）「太平洋諸島、中国の影、地域機構、5カ国脱退表明 台湾承認、1カ国に？」<https://mainichi.jp/articles/20210729/ddm/007/030/158000c>（2022年10月25日最終閲覧）。

<sup>9</sup> ポーンペイ島には、それぞれに最高首長を頂点とする5つの首長国がある。ここで取り上げる最高首長夫妻は、そのうちの1つの首長国で最高首長を務める男性とその妻である。

<sup>10</sup> Lifestyle Inc.（2012, February 21）“Royal Treatment at the Philippine Heart Center,” <https://lifestyle.inquirer.net/35691/royal-treatment-at-the-philippine-heart-center/>（2023年2月28日最終閲覧）。

あるフィリピン系病院で治療を受けており、この病院の医師から海外での検査を勧められた。その際、中国の医療機関に行くという提案もあったが、彼らはフィリピンに行くことを決意した。最高首長夫人はその理由として、中国の文化よりもフィリピンの文化の方がポーンペイの文化に近いこと、フィリピン人相手だと英語でのコミュニケーションが容易であること、渡航費や医療費が比較的安価で済むことを挙げている。また、同じインタビューのなかで、最高首長は自身の兄弟がフィリピンの心臓病センターで手術した際のエピソードに触れている。最高首長の兄弟は、自身の手術が執行された日に自身の息子が誕生したという偶然の重なりを記念して、生まれてきた自身の赤ん坊にフィリピン人の医師の名前を付けたという。

こうしたエピソードからは、オセアニアへの中国の進出という現代政治の構図とは異なり、現地の住民が中国人ではなく、むしろフィリピン人とより積極的に関係を築く様子が垣間見える。これらの事例からは、中国や台湾をアクターとする外交レベルと比べても、より雑多なアジア系と島民との独自の関係性が生活レベルにおいて展開されることがわかる。

さらに、過去に遡っても、ミクロネシアでは、16世紀にフィリピンとグアムを拠点とするガレオン船が中国とメキシコの取引を担い、20世紀前半のミクロネシア（南洋群島）には日本の本土出身者や沖縄出身者、朝鮮半島出身者が移住するなど、「中国の進出」に限定されないアジアからの多様な関与があった<sup>11</sup>。こうした歴史を鑑みれば、これらの地域は、東アジアや東南アジアの雑多な諸勢力が進出する流動的なフロンティアとして位置づけられる（cf. D’Arcy and Mayo 2021）。

多様なアジア系の交錯への注目は、オセアニア島民と外来者との関係性だけではなく、雑多な流入者の複雑な経験を捉えることも可能にする。以下では、小谷汪之の著作（2019）で提示されるエピソードを中心に、アジアとオセアニア双方への流入者としての経歴を有した中島敦の特異な経験に触れておきたい。

以下は中島敦の略歴である（小谷 2019: xiii-xiv）。

1909年：誕生

1922年：漢文教師の父親の転勤により、朝鮮総督府京城中学校に入学、1926年に卒業。

1927年：父親の勤務地である中国の大連に帰省中、助膜炎にかかり、満鉄病院に入院。

---

<sup>11</sup> 本稿では「オセアニア島嶼部への中国の進出」に還元されない雑多なアジア系の関与に着目するが、オセアニアの華人に関する市川哲の研究（2010）によると、同地域に進出する華人のあり方も一枚岩的なものではない。むしろ、市川が論じるように、過去から現代にかけての華人の移住経路には現代的脈絡に還元されない多様なパターンがあり、それが華人コミュニティの内部構成を複雑化させている。

1941年：パラオの南洋庁に赴任。

1942年：死去

死後：「山月記」「名人伝」「李陵」などの作品が発表される

上記の略譜からも明らかなように、中島はパラオの南洋庁に出向する以前に、朝鮮半島や中国への移住を経験している。彼はそのうえで、日本本土出身者、沖縄出身者、朝鮮半島出身者などの雑多な移住者が現地住民と共存する南洋群島に移住し、そこで新たな暮らしを送ることになる。その生活のなかで、中島は「しばしば「沖縄」と出会い」（小谷 2019: 202）、妻のタカと以下のような手紙のやり取りをしている。

トラック諸島の夏島では、公学校で開かれた海軍慰問演芸会を見に行き、「沖縄踊りが沢山あって面白かった。日本の踊は、おかしくて見ちゃいけない」と妻タカ宛ての手紙に書いている。(……) サイパン島では、彩帆劇場で「琉球史劇、北山風雲録」という芝居を見たが、「劇中、聞き取れしは、数語」に過ぎなかった。妻タカに宛てては、「二時間ばかり見ていたが、解った言葉は四つ五つしかない。それ程沖縄の言葉は、標準語と違うんだよ。しかし、琉球の風俗と、踊とが面白かった」、と書いている。(……) 中島にとって、「沖縄」は、朝鮮や中国よりももっとずっと遠い「異国」だったのであろう。朝鮮や中国は少年時代に自ら体験した地であり、漢籍を通してその文化に深く親しんだ世界だったのに対して、「沖縄」の人も言語も文化も南洋に来て初めてちょっと触れただけだったからである（小谷 2019: 202-203）。

小谷が論じるように、中島にとっては、朝鮮や中国は慣れ親しんだ世界であり、南洋群島で初めて出会った「沖縄」の方がむしろ「異国」であったのだろう。アジアとミクロネシアの複数の場所を行き来した中島のエピソードは、国民国家とは異なる地理的な想像力を掻き立てるものであるという点で興味深い。この事例は一例に過ぎないが、アジアとオセアニアを移動・横断する行為者の複雑な経験に迫ることは、海域に着目する視点からアジアとオセアニアの地域像を再創造するための課題の1つになりうるだろう。

#### 4. おわりに

本稿では、海域アジア・オセアニアにかかわる今後の事例研究を進めるにあたり、どのような課題の設定がありうるのかを、断片的ではあるが具体的な諸事例をもとに素描してきた。最後に、ここまでのスケッチを整理して本稿の結論としたい。

本稿ではとりわけ、オセアニア出身者の移住経験や移民コミュニティの形成にはじ

まり、オセアニアに移住する人々の雑多さやそれに伴う複雑な経験に至るまでの断片的な諸事例を取り上げ、「地続きのような交流がなされる海域」という視点からみた人の移動と交錯の様相の一端を描いてきた。

この描写の焦点は、一方ではオセアニア島民が海をわたり日本を含むアジアで何らかの経験をする事への注目であり、他方では東アジアや東南アジアから海をわたりオセアニアに移動する雑多な人々の関係性と経験への着目であった。両者は異なる課題に見えつつも、複数の場所での調査研究を指向する「多所的民族誌」(multi-sited ethnography)をめぐる人類学的な議論(Candea 2009)が示唆するように、2つの課題は、異なる文化的背景を持つ人々が1つの場所に流入することを焦点とする点において硬貨の裏表の関係にあると考えられる。つまり、同一の人々(オセアニアの特定社会の出身者)が異なる場所(アジア諸社会)に流入して自らの文化を再生産するという議論を裏返せば、異なる人々(雑多なアジア系)が同一の場所(オセアニアの特定社会)で出会うことを通じて創発的に文化が生成されるという議論に行き着く。

本稿はまさに前者から後者に至る人の移動・移住の様相を断片的に描くことにより、特定の人々と場所の結びつきを所与とする固定的な地域像ではなく、人々と場所の流動的な関係のもとでオセアニアとアジアが多様に交錯する地域の像に、多少なりとも迫ることを目指すものであった。ただし、本稿では断片的で偏った事例をもとに予備的な検討をしたに過ぎない。今後は調査研究と文献研究にもとづく詳細かつ視野を広げた事例研究から、オセアニアからアジアまでの海域における人の移動やそれに伴う経験、それらの人々を受け入れる社会の身構えについて継続的な検討をしていきたい。

#### <参考文献>

秋道智彌(編)

1998 『海人の世界』同文館。

市川哲

2010 「現地化、再移住、新移民——太平洋島嶼地域における華人社会の変容過程」

塩田光喜(編)『グローバル化のオセアニア』pp. 109-124、アジア経済研究所。

小野林太郎・長津一史・印東道子(編)

2018 『海民の移動誌——西太平洋のネットワーク社会』昭和堂。

河野正治

2019 『権威と礼節——現代ミクロネシアにおける位階称号と身分階層秩序の民族誌』風響社。

北原卓也

2020 「トンガ出身者——ラグビーを職業とする人々」駒井洋・小林真生(編)『変容する移民コミュニティ——時間・空間・階層』pp. 162-163、明石書店。

黒崎岳大

2019 「活発化する中国の海洋進出と太平洋の国際秩序の動揺」『パシフィックウェイ』53(5): 369-373。

2022 「太平洋島嶼国をめぐる米中対立」『外交』74: 132-137。

小谷汪之

2019 『中島敦の朝鮮と南洋』岩波書店。

清水昭俊

2004 「カンザス市地域のポーンペイ人移民——移民コミュニティの形態と形成過程」清水昭俊（編）『太平洋島嶼部住民の移民経験』pp. 181-222、一橋大学大学院社会学研究科社会人類学研究室。

関根久雄

2023 「開発援助——「地域的近代」の模索」石森大知・黒崎岳大（編）『ようこそオセアニア世界へ』pp. 247-262、昭和堂。

前川啓治

2004 「国境を越える共同体——ミクロネシア連邦共和国チューク人移民の民族学」前川啓治『グローカリゼーションの人類学——国際文化・開発・移民』pp. 136-160、新曜社。

八塚正晃

2018 「中国の太平洋島嶼国への進出と「一带一路」構想」『NIDS コメンタリー』73: 1-7。

渡辺柴乃

2019 「「一带一路」構想の変遷と実態」『国際安全保障』47(1): 1-14。

Candea, Matei

2009 Arbitrary Locations: In Defence of the Bounded Field-site. In Mark-Anthony Falzon (ed.) *Multi-sited Ethnography: Theory, Praxis and Locality in Contemporary Research*, pp. 25-45. London: Routledge

D'Arcy, Paul and Lewis Mayo

2021 Fluid Frontiers: Oceania and Asia in Historical Perspective. *The Journal of Pacific History* 56(3): 217-235.

Falgout, Suzanne

2012 Pohnpeians in Hawa'i: Refashioning Identity in Diaspora. *Pacific Studies* 35(1/2): 184-202.

Hubbard, Charles

2016 Place Out of Place: A Pohnpeian Chiefdom in Kansas City. *Oceania* 86(2): 151-173.

Pinsker, Eve

1997 Traditional Leaders Today in the Federated States of Micronesia. In Geoffrey White and Lamont Lindstrom (eds.) *Chiefs Today: Traditional Pacific Leadership and the*

*Postcolonial State*, pp. 183-196. Stanford: Stanford University Press.

Puas, Gonzana and Paul D'Arcy

2021 Micronesia and the Rise of China: Realpolitik Meets the Reef. *The Journal of Pacific History* 56(3): 274-295.